

コーヒーブレイク

米海軍横須賀基地回想記

神川 彰

Kamikawa Akila



1. 序

人生は旅に例えられますが、私は今、まさにそれを実感しています。

日本を隅々まで歩いたわけではなく、まして、外国にいたっては、片手で数えられるほどの国しか訪れたことがない私ですが、子供の頃から、人は、一人ひとりが一国の城主であると思っていました。友達はそれぞれ余所の国、すなわち、友達と遊ぶことは立派な国際交流であると、ずいぶんませたことを考えていたようです。

無から生を享け七十四年、私がどれほどの人に出会い、どれほどを学んだか、はかり知ることはできません。本当に、いい旅をしました。

『出る杭は打たれ、出すぎる杭は引き抜かれる』日本文化の中で、私は、『付和雷同』をものともせず、理不尽を忌みながらも人を思いやり、見て見ぬ振りのできない不器用な人間を貫いて生きてきました。世間からは、今でも、『変さ値』の高い人間に見られますが、私は、この生き様をむしろ誇りに思っています。何故なら、これは、両親が私に残してくれた貴重な財産であると信じるからです。

希望退職を選択したことで、私は平均的日本人よりはるかに長い道りを歩いたと感じています。しかも、そのほとんどが曲がりくねっていましたが、犬には笑われるでしょうが、突き当たった棒の数は天文学的でしょう。しかし、当たって感じた痛みは、そのまま、その後の人生の教訓として活かされています。

このような、絶滅危惧人を自称する私が、今だから言える『いい旅』を振り返り、思い出を綴ります。

2. 米海軍横須賀基地艦船修理廠

私が定年を迎えた仕事場です。名村造船所を退職後、船とは無縁の世界に身を置いていた私に懐旧の念が台頭し、できるなら船の世界で仕事人生を終えたいと思いはじめた、ちょうどその頃。米海軍横須賀基地にご縁をいただきました。平和を愛するひとりの人間として、灰色の船には少なからず違和感を抱いていましたから、当然、躊躇しました。ところが、歴史の世界でしか知らない戦争に、今も直面している国の現状を知らずしてとやかく言う資格は無い？懐旧の念が、屁理屈にも似た理由を持ち出して、私を掻き立てたのでしょね。私は、横須賀防衛事務所に駐留軍等労働者として採用され、米海軍横須賀基地の艦船修理廠(Ship Repair Facility以降SRF)のDockmaster(以降DM)に任じられました。その、大きな、そして有り難い後ろ盾が名村造船所で培われた知識と技術でした。しかし、その引き出しは完全に経年劣化。そこで、本棚に眠る埃だらけの『理論船舶工学』を、懐かしくそして愛おしく引っ張り出したことが、我ながら可笑しく思い出されます。

3. 駐留軍等労働者

在日米軍施設で働く従業員を指します。防衛省に雇用され、このように呼ばれますが、処遇は一般の仕事人と何ら変わりはありません。準公務員と思われることもあるようですが、立場には全く関係なく、言わば、日本国に採用され、米国に派遣される、世に言う『派遣社員』とお考えいただければ分かりやすいでしょう。しかし、労務費の原資が『同盟強靱化予算』と改称された、いわゆる『思いやり予算』であることから、そう思われるのかもしれませんが。このような立場にありながら、その現実を真摯に受け止めて働く駐留軍等労働者に、残念ですが出会うことはありませんでした。そこには、『親方星条旗』に染まった、『民』とはかなり異なる、『官』もどきの世界が広がっていたのです。私の中で動き出した『理不尽嫌い』を、業務に専念することで抑制しながら過ごした日々が思い出されます。

4. SRFのDM

さて、DMと聞けば、私たち日本人は、新造船や修繕船の海上公試運転、入出渠、岸壁への離着岸など、造船所構内あるいは近隣の海域で操船の指示を出す、言わば、造船所に所属する船長を思い浮かべます。一方、SRFのDMは、『操船をのぞく艦船の入出渠に関わる全ての業務を司る人』を意味します。これは、全米海軍共通の認識です。従って、米海軍のDMは海技免状を必要とはしませんが、盤木配置図の作成、艦船の入出渠状態算出、組織的には上司にあたる米海軍 Docking Officer (以降 D0) の教育と実作業の補佐などを主たる業務とします。さらに、ドック本体はもちろん、排水ポンプなど付帯設備の保全にも、オペレーターとして参加しますから、受け持つ業務は広範囲におよびます。

因みに、入出渠時の操船は、岸壁から渠門までを Docking Pilot (以降 DP) が、渠門手前からドック内の定位置までを D0 が、それぞれ担当します。

5. DMの実務

中でも私が力を入れたのは、意外と思われるかもしれませんが、D0の教育と補佐でした。上司にあたるD0次第で、現場の日本人スタッフはもちろん私自身が気持ちよく働くことができるか否かが左右されるわけですから。これと言って、特別なオリエンテーションを用意したわけではなく、入出渠作業や設備の保全など、機会がある度にかかなりの時間を費やして取り組んだものです。今でも親交の続くある大佐(当時は大尉)が、離任するにあたって私のオフィスへ挨拶に来た時のことです。ドアを開けるなり、「アキラあ…、あなたは恐かったア！」と。微笑みながら大声で叫んだ彼の顔は、今でもしっかりと脳裏に焼き付いています。

聞くとところによると、米軍士官に面と向かって意見した日本人は、どうも私が最初だったようです。私は、同じ職場で働く人たちを、家族と捉えていましたから、親が子を躱けるように、若いアメリカ人士官であろうが、日本人の若者であろうが、同じ人間として接することを心がけました。それが、親としての役割だと信じていたからです。腹を割って話せば、人種の違いなど気にすることは、全くありません。



写真1 第7艦隊旗艦入渠後。担当士官たちと。(中央)



写真2 音響測定艦入渠後。担当士官たちと。(中央)

6. 実務のための旅

いくぶん、時間を遡ります。

設計部門の経験しかない私の、ドックに関する知識や技能は何処から来たの？と、思われるでしょう。そこで功を奏したのが、私の『旅好き』です。入廠して直ぐ、SRF 内の旅をはじめました。ドックに関わる Work-shop をめぐる旅です。全ての関連ショップに親方を訪ね、ドックに関わる業務の講習を受け、必要と思われるものは、使用する機械の運転や工具の作動試験も依頼しました。SRF とは別部隊である、DP が所属する部門にも出かけました。当時の DP が日本の親方的人間で、入出渠に際するタグボートの配置や操船のポイントなどを細かく説明してくれました。分からなければ『プロ』に聞き、そして学ぶ。人生の鉄則でもあります。



写真3 対岸のヴェルニー公園から見た SRF

中央下の、やや黒く、横に細長く見える二つの部分が、明治時代に建設された、石造りの1号ドック（右）と2号ドックのゲート



写真4 2号ドック入渠準備（注水）

7. 余分な仕事

実務に精通することは仕事人として当然のことですが、私はむしろ、環境づくりに実務以上の時間を費やしたかもしれません。もっとも、それが実務に含まれると言われれば、お返す言葉は見つかりませんが…。その環境とは、もちろん、スタッフが気持ちよく仕事のできる環境です。とは言いながら、若者に迎合したり、上司に付度したりすることがあってはなりません。これは、私の流儀として最後まで貫きました。

余分な仕事のひとつが、ドッキングオフィス主催の BBQ 大会です。買い出しを、基地内のマーケットでは、米国価格で買い物ができる D0 たちにお願ひしましたから、破格の費用で開催できました。加えて、彼らの奥様連中には自慢の手料理をお願いしましたから、Potluck Party(持ち寄りパーティ)的雰囲気のとやかな BBQ にすることができました。開催は、たいてい金曜日の定時以降で、オフィスは基地内でも主要な通りに面していましたから、匂いを嗅ぎつけたショップの若者が、仕事帰りに立ち寄るには格好の場所でもありました。SRFの大佐には「次のBBQはいつ？」と、よく聞かれたものです。

これが、ショップの日本人スタッフには大きな刺激になったようで、「英語を勉強したい！」という若者が増えたのです。そこで定時以降、オフィスに D0 や彼の仲間を特別講師に迎え、若者たちとの楽しい勉強会がはじまりました。このように、日本人同士はもちろん、アメリカ人スタッフとの潤滑油的役割をはたしてくれそうなことには、積極的に取り組んだものです。

8. 余禄

『変さ値』の高いDMは、当然、基地内では異端児として見られました。『親方星条旗』に浸り、『付和雷同』を重んじる人種には煙たい存在だったでしょうね。しかし、士官クラスになると、私たちの想像以上に、日本の実態を観察しているものです。ことある毎に、士官たちとはよもやま話をしました。前出の大佐は、私が入廠後はじめて苦楽を共にした、日本人を妻に持つ士官です。そのせいかどうかは知る由もありませんが、彼がよく口にした言葉は忘れられません。

「日本は、アメリカを向きすぎてるよ。日本は、アメリカの同盟国だよ。属国ではないよ」

士官たちは、家族同伴で日本に赴任します。その多くが、子供たちとともに、広島と長崎を訪ねます。そして、真珠湾にも子供たちを連れて行きます。彼らは、歴史を双方の視点で学ぶことの大切さを訓^{おし}えているのですね。その彼らは、子供たちを大切にします。しかし、その『大切』の捉えかたが、彼らと日本人では、とてつもなく違うことも訓^{おし}えられました。彼らは、子供たちの将来を見据えて厳しく躾^{おし}けます。日本語で表すなら、『やっていいこと、悪いこと、やらなければならないこと』、所謂、基本的な生活習慣を、子供の頃からしっかりと訓^{おし}えます。一方、ほとんどの日本人は『甘やかす』ことを『大切にすること』だと、完全に取り違えていますよね。

彼らは、日本人が言う『社会人』という言葉を理解できませんでした。そのはずで、彼らは、人は皆、この世に生を享けた時から社会の一員と信じていますから。私も全く同感で、一般的な意味の場合は『仕事人』という言葉を使います。

DMの毒牙にかかったD0たちには申し訳ない思いが募りますが、その誰もが、前出の大佐と同じような言葉を残して日本を去りました。そして、いつの頃からか、私には“Japansaver”という、ニックネームがつけられました。『アメリカを向きすぎている』日本にあってDMは、彼らにも異端児に映ったのでしょうか。この過分なニックネームは、その後のエネルギー源として、私の中に、有り難くしっかりと蓄えられています。

9. 跋

コーヒーブレイクが長引いてはいけませんね。

このように私は、『変さ値の高いDM』として注目されました。手前味噌ですが、『存在感』があったのかもしれませんが。そういえば、名村造船所の社是は『存在感』。そのためには、一人ひとりが、存在感のある人であり、存在感のある仕事をしなければなりませんね。

名村造船所の『存在感』が、さらに大きく、さらに輝かしく世界に放たれるよう、願ってやみません。

執筆頂きました神川氏の概略の経歴についてご紹介します。

1974年	1月	株式会社名村造船所入社
1978年	3月	米国出版社Time-Lifeの日本法人で、国際化教育を専門に手掛ける企業の大阪支社に入社後に、東京本社勤務。米国本社のdownsizingで関連会社への転籍も経験
2000年	7月	SRF入廠
2010年	12月	SRF退職
		妻の生地・広島で、原爆資料館と平和記念公園の平和ボランティア活動に取り組む